

国際口承芸学会

第一二回世界大会報告

間 宮 史 子

て集まつたのも不思議はない。およそ六〇カ国から三〇〇人以上の参加があり、約二〇〇の研究発表があつた。日本から今までに多く多い、約一五名が参加した。まず、全体の概要を以下に示す。

〔期日〕 一九九八年七月二六日（日）～三一日（金）

〔会場〕 ゲッティンゲン大学（ゲオルク＝アウグスト大学）。一日目の開会式及び開会記念講演は大講堂にて、二日目以降の全体会、分科会は中央講義棟でおこなわれた。

〔プログラム〕

国際口承芸学会（ISFNR）の世界大会が、一九九八年七月にドイツのゲッティンゲンで開催された。一九九二年インスブルック（オーストリア）での第一〇回、一九九四年マイソール（インド）での第一回大会に続く、一二回目の大会である。ゲッティンゲンは、グリム兄弟が一八三〇年から七年間大学で教鞭をとり、ドイツ民俗学の礎を築いた町として知られ、その後もテオドール・ベン

ファイをはじめ、クルト・ランケ、エルフリーデ・モーザー＝ラートといった著名な口承芸研究者が活躍したところである。現在、ロルフ・ヴィルヘルム・ブレードニヒが率いる民俗学研究所には、世界の口承芸研究者の協力を得て進められている『昔話百科事典』の編集局がある。今回は、ブレードニヒを委員長として、民俗学研究所と昔話百科事典編集局が大会運営委員会を構成し、大会運営にあたつたのである。このような、口承芸研究のひとつの中心地であるゲッティンゲンに、世界中から多くの研究者が期待をもつ

七月二七日（月）九時～一〇時三〇分 全体会（二発表、以下同じ）一、一時～一二時三〇分 分科会（会場ごとに三ないし二発表、以下同じ）、一四時、一五時三〇分 分科会、一六時～一七時三〇分 分科会、一八時三〇分～ゲッティンゲン学術アカデミーによるレセプション（大講堂にて）。

七月二八日（火）九時～一〇時三〇分 全体会一、一時～一二時三〇分 分科会、一四時～一五時三〇分 分科会、一六時～一七時三〇分 分科会、一七時三〇分～口承芸の分類に関するワーキショップ、一七時三〇分～役員会、一九時～運営委員会。

七月二九日（水）五コースに分かれての国内見学バス旅行。また希望者は、この日八時三〇分～一七時の間『昔話百科事典』編集局

を訪問可能。

七月三〇日（木）九時～一〇時三〇分 全体会三、一一時～一二時三〇分 分科会、一四時～一五時三〇分 分科会、一六時～一七時三〇分 国際□承文芸学会総会、一八時～ ドイツ民俗学会の□承文芸研究委員会、一八時～ 国際□承文芸学会倫理準備委員会。

七月三一日（金）九時～一〇時三〇分 全体会四、一一時～一二時三〇分 分科会、一四時～一五時三〇分 分科会、一六時～一七時三〇分 全体会五、一九時三〇分～ 晚餐会（学生食堂にて）。

今大会のメインテーマは「□承文化の展望」である。これは、「□承」のテーマの広がりと語りの多様性をとらえ、「語る人間（ホモ・ナレンス）」の現在と未来を見据えることをねらつたものである。サブテーマは「未来を語る」「日常の語り」「語りとジエンダ」「文化間コミュニケーション」「□承とメディア」「□承文芸研究と心性」の六つで、このサブテーマごとに分科会がもたれた。

大会期間中、全体会は五回おこなわれたが、その発表者とテーマは次の通りである。

一、マーガレット・ミルズ（コロンブス、オハイオ）「所有、記録、効果—人文社会学研究の倫理問題における□承文芸研究者の賭け」、クラウス・ロート（ミュンヘン）「交差する境界—□承文芸の翻訳と文化的受容」

二、ジリアン・ベネット、アン・ローボトム（マンチエスター）「淑女として生まれ、聖女として死す—英國のマスマディアと世論におけるダイアナ妃の神格化」、エダ・カルムレ（タルトウ）「エストニア号の沈没（一九九四年九月九日）にまつわる伝説」

三、ガリ・ハッサン＝ロケム（エルサレム）「聖書の民のテクスト化—現代イスラエルにおける□承文芸の出版とナショナルアイデンティティ」、パトリシア・リサート（ダブリン）「オーガスター・ゲレゴリーの『西アイルランドの幻想と信仰』（一九二〇）における□承文化とジエンダーについての展望」

四、オレシャ・ブリチナ（キエフ）「日常のコミュニケーションにおける逸話、ジョーク、しゃれ—観察と実験における民俗テクスト」、パトリック・ムラン（コロンブス、オハイオ）「民族と民族誌的寓意」

五、アルフレッド・レーマン（ハンブルク）「思い出の風景—視界の変化と語り意識の分析」、ヴィルモス・ヴォイクト（ブタペスト）「現在の□承文芸以前の展望は暗かつた？」

これら一〇の研究発表は、シェンダの開会講演とともにすでに公刊されている。⁽¹⁾

分科会は、前記の六つのサブテーマに従い、七会場に分かれて同時進行でおこなわれたため、個々の参加者が聽ける研究発表の数には自ずと限りがあった。ここでは、大会で配布された発表要旨集なども参考にし、私の知り得た範囲で今大会の傾向や特徴を述べたい。

今回の大会で特にめだつたのは、「□承」の伝達媒体（メディア）への大きな関心である。□承文化の今日的出現として、その増大するマスマディア化や新しい話の生成がとり扱われた。全体会二の二発表は、その良い例である。また、インターネットや携帯電話といった電子メディアの、□承文化における意味についても論じられた。たとえば、ザビーネ・ヴィーンカーニピーフォ（フライブル

ク」による「携帯ストーリー、あるいは携帯電話の使い方」やヘルムート・フィッシャー（ヘネフ）「ワイルド番組の話―報告とコメントで構成されるラジオ番組における語り」、ハナ・フロシユコヴァー（プラティスラバ）「フォーケロア、あるいはフェイクロア―マス文化のネットにおける語り」、マレ・コイヴァ（タルトウ）「インターネット―語り研究のための新しい機会」などをあげることができる。「口承とメディア」分科会は、会期中九回開かれた。

ジェンダー研究もめだつて増え、分科会「語りとジェンダー」は七回を数えた。ガブリエラ・キリアノヴォヴァー（プラティスラバ）「女性と男性の語り―どこに違いがあるか?」、イザベル・カルディゴス（ファアロ）「昔話のなかのさまよう女性の窮屈な靴」など。「日常の語り」に関する分科会は九回もたれた。なかでも、現代の口承文芸研究にこの術語を導入し、この分野の研究をリードしてきたヘルマン・ハウゼンガ（テュービンゲン）の研究発表「話の解放」には多くの聴衆がつめかけた。ハウゼンガの発表は、会話のなかでどのように話がされるか、ということを経験文化学的に扱つたものであった。話そのものが、それを語ろうとする話し手に大変な圧力をかけており、この圧力は語ることによってのみ除かれること。すると、話は解放され、話し手もその話によつて解放される、というのである。

□承文芸研究における文化間伝達の問題については、全体会一でロートも論じたが、計一〇回おこなわれた分科会「文化間コミュニケーション」においても、さまざまなことが扱われた。たとえば、ジウラ・パツオライ（ヴェスピレム）「異文化における共通のこと

わざ」、S・カルロス（バンガロー）「インドの語りの状況におけるグリム童話」など。日本からも、竹原威滋「書承か口承か?『このひとの贈り物』(AT503)及び『宝の夢』(AT1645)の日本の類話について」と中山淳子「日本におけるラブンツエル」の二発表があつた。

今大会で最も多かつたのは「口承文芸研究と心性」に関する研究発表である。会期中に実に三〇の分科会があり、種々多様な問題がとり扱われた。このことは、世界の口承文芸研究において、現在このような問題意識が優勢であることを示している。たとえば、アンナ・レーナ・シーカラ（ヘルシンキ）「神話の伝統と心性研究」、イシドール・レヴィン（ペテルブルク）「ウラジーミル・プロップによる小話分類の試みへの疑問」、ドロテーア・ドブレヴァ（ソフィア）「社会主義村にまつわる話―ブルガリアにおける、話による過去と現在の克服」、リンダ・デーク（ブルーミントン、インディアナ）「風景と心景―メリヒエンへの民族誌学的新アプローチ」など。日本からは、小澤俊夫「昔話の音楽的性質」、間宮史子「日本昔話における『山野の異郷』のイメージ」の二発表がおこなわれた。

日本人による研究発表は四つとも、同じ七月二八日の同じ時間帯（一四時～一五時三〇分）に、三つの分科会場に分かれておこなわれたため、お互いに聞き合ふことはできなかつた。小澤、竹原、中山三氏の発表は、地元の日刊紙「ゲッティンガー・ターゲブラット」にとりあげられた。私の発表に関していえば、日本の昔話を知らない聴衆はあまり興味を示さないのではないかと思つていたのだが、予想に反して発表後二つの質問があつた。山野の異郷を訪問す

る主人公には何か属性があるのかと「どう」と、異郷訪問の前後で主人公の運命が変わらない話についての疑問であった。後者に関しては、司会者に促がされて聴衆の中から発言があり、それに対しても別の発言がありと、多少の討論に発展した。

会員総会は七月三〇日に開かれた。まず、総会議長をつとめるライムント・クヴィードランド会長（ノルウェイ）が、新たに選ばれた名誉会員を発表した。イシドール・レヴィン（ロシア）、ルードルフ・シェンダ（ドイツ）、小澤俊夫（日本）の三氏である。名誉会員となつたこの三氏は、総会で祝福を受けた。

続いて役員改選がおこなわれた。第三代会長として一〇年間つとめたクヴィードランド会長が勇退を表明していた。新役員は次のように決定した。第四代会長は国際口承文芸学会初の女性会長である。

会長 ガリ・ハッサン＝ロケム（イスラエル）

副会長 ジヤワハルラル・ハンドゥー（インド）、アフリカ地区

—エツエキエル・アレンビ（ケニア）、アジア地区—メフリ・バゲヘリ（イラン）、南米地区—マヌエル・ダンネマン（チリ）、北米地区及び役員会の議長—マーガレット・ミルズ（アメリカ合衆国）、ヨーロッパ地区—ハンス＝イエルク・ウーター（ドイツ）

その他の運営委員 クリストイーナ・バッキレガ（アメリカ合衆国）、ガブリエラ・キリアノヴァー（スロバキア）、アンナ＝レーナ・シーカラ（フィンランド）、会計—ボウ・G・ニルソン（スウェーデン）

次回大会開催地には、メルボルン（オーストラリア）とヘルシンキ（フィンランド）が立候補した。投票により、第一二回大会はメ

ルボルンで一〇〇一年に開催と決定した。さらに、一〇〇〇年七月（一七日～二二日）にナイロビ（ケニア）で中間大会が開かれることがなつた。この中間大会のメインテーマは「語りにおける思い出の重み」である。

今回のゲッティング大会は、マンモス大会であつたにもかかわらず、その進行はスムーズで、毎日その日に予定されているプログラムが滞りなく消化されていった。発表のキャンセルも、先の何回かの大会に比べると非常に少なく、研究発表はほぼプログラム通りにおこなわれたといってよい。分科会が七会場で同時進行したため、誰もがどの発表を聴こうかと悩んだはずだが、お目当ての研究発表を聴くために会場間を移動するのも全く問題がなかつた。大会進行のみでなく、会期中の昼食（学生食堂）及びコーヒープレイクの手配、五コースのバス見学旅行の実施、ゲッティング市内で過るすための様々な情報の提供など、すべてに行き届いた配慮がなされていた。これはひとえに、ブレーダニヒ率いるゲッティングチーム（大会運営委員会）の周到な企画と運営によるものである。最終日三一日の晩餐会では、多くの大会参加者が再び一同に会し、なごやかな雰囲気のうちにそれぞれ再会を約した。

今大会への日本人参加者は、四人の発表者以外に、本学会から高橋吉文氏、虎頭恵美子氏、村上健太氏、鉢野のぞみ氏の四名、さらには、ヴァーパータール、ゲッティング、ミコンヘンへの各留学生及びその他数名だつた。

（註1） *Fabula*, 39 Band (1998) Heft 3/4, 40 Band (1999) Heft 1/2.
(おみや・みみ／＼白百合女子大学非常勤講師)